

戸田城外著『中等學校入學試験の話と愛児の優等化』(3)

塩原将行

今回は、戸田城外が家庭教育学総論として執筆した『中等學校入學試験の話と愛児の優等化』の核心部分にあたる以下の第四章から第八章を翻刻紹介する。

- 第四章 入學試験制度の話
- 第五章 受験準備の話
- 第六章 家庭教育で児童を優等化する方法
- 第七章 入學試験活用法
- 第八章 どんな中等學校を選択するか

本書の解題は、既に『創価教育』第3号に掲載しているので二点の補足にとどめたい。尚、本書に関する杉本芳雄、馬場百々子の研究会での報告は、『創価教育研究』第2号(創価教育研究センター 2003年)に掲載しているのであわせて参照されたい。

第一に、本書における戸田の考え方を要約すると、一部の例外を除いては全ての子どもを立派に教育していく事は可能である。その上で、劣等児を生みだしているのは学校であるということである。能力(理解力等を含めた総合的な力)の異なる子どもを同じクラスで教育することにより、授業の進度を中間の能力の子どもに合わせた場合でも、中間以下の子どもは、その進度についてこれない。この子どもたちは、この状況が年を追って深刻化して、遂には、「劣等児」というレッテルが張られてしまうというのである。しかし、戸田は、このような子どもたちも社会に出てそれぞれの分野で活躍していることから、本来「劣等児」はいないと明言する。

それでは、このようなことが起こらないためには、どうしたらよいのか。戸田は、その子どもの能力を正確に判断したうえで、その子どもに適した進度で学ばせることが肝要で、親の見栄で子どもの能力には適していない有名校に無理に入れたり、運よく合格すればよいと多くの学校を受けさせるのはよい事ではない、親にとって大事なことは、子どもに合った学校を選び、その子に合った進度で成長させることであると述べている。

このような本書の考え方を端的に表わしている後年の戸田の発言を紹介する。

「肋膜炎で休学して学科が遅れた」との質問に対して

学校を休ませずに、無理をさせないようにしなさい。奥さんの心配は、さきに行く子供たちに遅れないで、急いでついていかせたいと思うことでしょう。

教育上の結論をいえば、私は低能児教育と優等児教育とを十年間やりました。昔は、五年生から中学には入れる制度があったのです。学校ではとうてい無理だという人を、私はだいぶ入学させました。有名な学校には入れると、親は自慢したいのがつねです。劣等児教育についての結論は、年をとれば、たいてい、似たようになるということでもあります。東大を先に出た者が、先に出世するとはかぎりません。小学校だけしか出ていない者が、成功することもあります。急いで学校に入れる必要はありません。おとなが小学校一年生にはいれば、かならず一番になれるようなものだから、一、二年遅れても、完成するほうがよいのです。

だいたい、見栄で早く学校へやり、無理をさせるよりも、小さいときがっちりやらせて、世の中へだせば、体力がものをいいます。一、二年遅らせても、そのほうがよい。学校を遅らせることが秘訣です。

(『戸田城聖全集 第2巻 質問会編』、聖教新聞社、1982年、366-367頁)

本書の出版から20年以上経た後の発言であるが、戸田の考えは一貫して変わっていないことがわかる。

第二に、265頁以下の綴方科に関する「学習上の欠陥補給方法」においては、牧口の文形応用主義にもとづいた教授方法がいかなるものであるか詳しく述べられており、戸田が展開した創価教育学にもとづく授業実践を垣間見ることができる。戸田は、翌年の1930(昭和5)年6月には、『推理式指導算術』を出版、さらに、1933(昭和8)年からは『推理式読方指導』4冊を山田高正と共著で出版(後に、戸田の単著『推理式指導読方』4冊となる)し、創価教育学に基づいた自習書としてまとめられていく。

2度出版された戸田城聖全集には、『推理式指導算術』は収録されているが、共に改版改訂87版を底本としており、初版にもとづくものではない。『推理式読方指導』、『推理式指導読方』については、全集出版の段階では未発見のため、収録されていない。今後、教育者としての戸田城聖を研究していくためには、これらを紹介していくことは不可欠であると筆者は考えている。

最期に、『創価教育』第3号より始めた本稿の連載完結にあたり、翻刻作業を補助してくれた本学学生諸氏に心よりの謝意を表したい。

凡 例

- 一 原文は縦書きであるが、それを横書きに直した。
- 二 本文の表記により記載したが、旧字体で記載できない漢字については新字体に改めた。
- 三 複数字分の繰り返しを示すおどり字は、>>、或は>>>と字数分表記した。
- 四 誤字、誤植、誤記と考えられる個所には(ママ)と表記した。
- 五 脱字と考えられる個所は、[]で加えた。
- 六 判読できない文字は、■と表記した。

(本文)

第四章 入學試験制度の話

一 理想的入學試験制度

私共はよく理想的入學試験制度として抽籤と言ふことを聞きます。「籤引で入學さすればよい」と、これは實に抽象的な概念的な選抜法で、近視眼的理想論で御座います。一寸聞くと非常に結構であります、國家百年の大計として、行政官がどうして採用し得ませうか。

此の論者の尤も理論的な所説を掲げますと、「現在の各中等學校は、國家經濟の見地から頭腦の優秀なものを教育しようとし、自然の理として競争試験をうんで居るのである。此の優秀教育の思想は、官吏養成の意味の昔の官立大學と、現在の中等學校と混同した思想である。現在の中等學校の存在の價値は、半義務的のもので、一般的存在である。優秀生だから教育し劣等生だから教育しないと言ふ事は間違ひだ。宜しく喜んで劣等生を收容す可きである。勿論、府、縣立、私立を問ふ可きではない。現在の様に府、縣立が優秀生をのみ教育すると言ふ事は、府、縣税によつて設立せられた中等學校として、間違ひではないか。納税義務者の子供を頭腦の優劣によつて區別するのは、非理論的である。」と〔。〕私は双手を舉げて此の説に賛成致します。教育行政の立場からも、國家教育の立場からも、劣等教育と言ふ事を中等學校の教育の外に置いてあることについては、私も多年不服に思つて來た所であります。而しこれは義務教育である小學校すらも、何の研究をも、持たない日本の教育界では、當然の事でありませう。けれども私共は當然として黙視することを許しません。須らく中等學校は此の點に留意すべきであります。殊に府縣立が劣等兒の入學を拒む理由は何處にありませうか。進んで劣等兒の入學を許す可きであります。此處に於いて、府、縣立が劣等兒を收容する様なれば劇しい競争試験はなくなるし、又劣等兒を收容する以上は抽籤でも結構ではないかと。言ふ議論が生じて參ります。誠に其の通りで現在の非教育的な受験準備の弊と、入學試験様式の不統一とからは立派に救ふことは出來ます。しかしこれを行政上の事實と致しますと、一時的の鎮壓劑として、昭和二年の訓令と同一効果よりないので御座います。實に抽籤法は根本的な入學試験廢止ではなく、府、縣立の競争を私立の競争試験に代へる丈の政正で御座います。府、縣立は設備經費の點から、いくらでも劣等兒を收容することは出來ます。又私立でも基礎の確實な中等學校は文部省の訓令に基いて、抽籤法で優、中、劣と生徒を募集し、各様に教育出來ませうが、經費設備の不完全な學校は抽籤外れの優秀生を募つて簡易に教授の徹底を計り優良校としての評判を取得しようと計畫致しませう。此の時當局は、私立に對して優秀生を教育するなどは、訓令し得ませうか。劣等兒も教育してやれとは言へませうが、優秀生を教育するなどは、どうして言ひ得ませう。加へて優秀生のみを教育する私立學校が新に設立されたと致しまして、どこに文部省がこれを認可しない理由がありませう。そうなると父兄は親の情、兄の情として、我が子に、弟に優秀生と名をつけておきたい上に、又優秀の中で鍛へて見たいと言ふ教育的論據から、結局私立の數校に競争試験が生じます。されば抽籤法は現在府立にあつた競争試験を私立に移したに過ぎない結果となるのであります。此の理は武藏高等學校に劇しい競争試験の在することで證明されて居ます。即ちこれは昭和二年の訓令が中等學校の入學許可權の大部を小學校長に移つたのと相依た結果であつて、世を益する所は幾何でも御座いませぬ。又、世に學區制を説く人も多く御座いますが素人の考へで入學難に幾何の利益のないことは些少の思考で直ちに認識致されませう。されば眞の理想と致しますのは、

能量試験所の設置と其の利用で御座います。即ち入學試験の全然的廢止ではなく、根本的な科學的妥當的の變改で御座います。昭和二年の訓令や抽籤法の様な一時的な姑息なものでは御座いませんが、其の趣旨の社會的一般への徹底と、行政的準備、費用等の點から理想論たるを免れないので御座いますが、しかし私が此處に聲を大いにして叫ぶの所以は、將來大いに實現する可き可能性あるを信ずるが故で御座います。

A 組織

設立……府縣立とす。

機關……所長一名。

主任若干名。

技師若干名。

助手若干名。

技師……即ち能量検査員で、身體検査の場合の醫師と同じく、兒童の能量を検査する人で御座います。

言ふまでもなく能量検査に必要にして、且充分な資格を備ふ可きであり、其の資格には高等普通學の素養は勿論のこと、教育學、心理學、論理學、醫學の専門的智識をも必要とし、加へて實地に兒童教育に當つた經驗をも必要と致します。

助手……〔助手〕は技師程、一般的素養がなくとも其一部に優れて技師の補助をなすので御座います。

主任……主任は技師の仕事を統督して所長に對する責任を負ふのであります。

所長……所長は内部を統督し外部に對する責任を負ふのであります。

B 方法

能量検査の方法は従來の様に「習學」の結果の試験ではなく、眞の能量の検査で御座います。

どんな〔に〕數學が出来るか。どんなに澤山記憶して居るかを試験するのではなく、どんなに數學の出来る子に教育することの出来る子か、どんなに澤山に記憶させることが出来る子かを、検査するので御座います。丁度醫師が人間の肉體を検査する様に、兒童の本質的能量を検査するので御座います。其の方法の委しくは、専門的研究による可きであります。次に例として概略の方針を暗示致します。

- 1 發表能力……

言語、	助作	}	見た事、聞いた事、よく理解したことについての發表力の評價。
文章			
- 2 觀察力……

粗	}	日常の習慣か、天性かに分けて評價〔。〕
細		
- 3 意志力……作業にどれ丈の意志の強さを以つて従事するかを評價。
- 4 理解力……速度、どれ丈の速さで智識を理解するかを評價。
正確度……理解の正確の度合を評價。
- 5 記憶力……長期記憶の強弱の評價。
短期記憶の強弱の評價。
- 6 推理力……差違性と同定性識別の評價。

方則發見能力の評価。

7 技能量……
字畫
手工
裁縫 } に至る天性と習慣性の評価。

總 評

以上の區別を數百點にわけて、一定の標準下に決定し、一、二年置きに検査をし、其の變化が肉體的原因によるか、又は教育的影響によるかを調査し、併せて其の個性的變化率をも明かにしてお置くのであります。

C 検査票と其の利用

此の票は必ず小學校卒業の證書に附屬させることを必要と致します。父兄は、これによつて正確に兒童の能量を知り誤りのない職業を選択致しませうし、又商店主は、これによつて店員を採用し、會社はこれによつて給仕を採用致します。中等學校はこれによつて試験なしに兒童に入學を許可致します。萬一同能量程度前後の兒童丈で定員を超過〔し〕ました時こそ、抽籤が正しいことで御座いませう。

若し、試験所に兒童を集めることが至難でありましたなら、小學校を巡回して検査する丈で充分でありませうし、延長しては高等學校の入學試験にも利用出來、一步進んでは詰込み教育の弊を打破することも易々たるものでありませう。

二 現在の入學試験制度

前節の様な試験制度は根本的なものでありますが故に、非科學的な記憶的な受験準備の弊害を救ひ、昭和二年の新制度が各方面に與へて居る苦痛を除去し、情實地獄を滅却する功德のあるもので御座いますが、社會は一般に直ちに認識も出來ませんでせうし、當局としても費用及法令などの點から直ちに設立することも出來ません。されば此の理想出現の曉まで漸定的な方法が講じられなくてはなりません、これが私が此處に現在の入學試験制度論を説く所以で御座います。従來の制度の缺陷は次の四項目の改善で廢止し得ると思ひます。

- 形式的 { 1 非教育的受験準備廢止
- 2 内申書制度の廢止
- 3 數校に多數の兒童の集ることの防止

實質的 { 4 試験内容の改善

形式上の改善

試験をして、優秀生を取ることを認めるとしても、府縣立丈は少なくとも劣等兒をも教育する様にしたいものであります。斯くすることは、非教育的受験準備廢止の大きい原因となり、劣生指導教育の風潮を招來する一大動因ともなりませう。しかし眞に此の非教育的受験準備の弊害を除去するためには嚴命を當局より發すること以外には方法は御座いません。そして父兄と小學校長に、小學校教育本來の目的のために協力して精進する様に仕向けるので御座います。夜の六時、七時まで小學校で準備教育を施し、時によると正規の學科をも之れが爲に放棄することは、各地

によく見受ける所で御座います。此れは監督官廳の威信のないこと、父兄の強請とに原因するもので御座います。しかし前章にも申しました様に、父兄の強請は當底理解することの出来ない本質的のものでありますから、監督官廳の徹底的な命令で此れを廢止する以外に残された方法はないので御座います。此の點について後章再び委しく論評致しますが行政上の問題として、小學校教育を無視して居る小學校長を勇敢に二三人處罰する事によつて、此の弊風を打破することは何等困難なことでは御座いません。

よく言ふ言葉に「小學校で準備をしないと富有のもの丈準備をうけることになり、教育の機會均等でない」と一寸考へると一理ある様に聞えますけれども、今でも家庭教師がついて、小學校へ準備を任せない家庭は澤山御座います。何も、特に其の時代になつて現はれる現象では御座いません。中等學校へ行くこと其れ自體が行き得ない家庭事情の兒童から見たら特權なので御座いますから、其の上準備教育を小學校で受ける當然の權利ありと考へられる必要はありますまい。受けさせたいものは家庭で勝手に受けさせす可きであつて、父兄の當然の權利として、小學校教育の一部として主張される理由は全然ないのであります。されば其の非理なる要求に迎合して準備のために小學校教育を無視して居る學校長は宜しく處罰す可きであります。

又次に内申書の廢止は中等學校側の希望であり、實際的に弊害と不平等の多い事が認められて居るものでありますから、當局として其の使用と否とを中等學校の任意と認めるのが至當であります。又(3)の競争の劇甚を避けるためには、各中等學校が官、府、縣、私立を問はず一齊の日に試験をし、定員に志望者が満たない學校にのみ再試験を許し、定員以上に志望者が集つたのに、人を選んで許可を定員以下に止めて再試験をする學校は、絶対に此れを許さないと致しましたら必ず良い結果が生まれます。斯くする時は父兄も學校を選択するに深甚の注意を拂ひ、數校へ願書を出すと言ふ弊風もなくなり、中等學校に對する選擇心も精密になつて、無駄な競争を省き、延いては中等學校が教授訓練に熱心となつて、各特長を發揮し、自校の存在を闡明にしようとして心掛ける様になりませう。

實質的方面

實質的方面の改善と言ひますと、試験問題の改善であります。しかし試験問題は中等學校の自由裁量に任して、しかる可き質のものでありますから、當局に於いて深く之に干渉する事は避けねばなりません。けれども、其の大綱を示すことは至難でもなく、其の大綱が科學的であり教育的でありますなら、中等學校も舊制度に歸ることよりも、新制度を一步踏み出で此の大綱に服し、教育改善の爲に努力致す可きであります。實際に中等學校の入學試験の如きは、第三者に、兎や角言はれ可き質のものではなく、各中等學校が一步先んじて民衆を率ゐ、決して此んな問題を起す可きではありません。

私の主張致します試験内容の改善は、筆記試験とか口答試験とかと言ふ末節はどうでもよいので、其の根本である試験の問題を變改して、試験に對する弊害を除去しようと言ふので御座います。今までの試験はどこまで數學が出来、又何んなに澤山知つて居るかを見ようと言ひました。其處で奇妙な受験準備が小學校に流行したので御座いますから、斷然此の點を改めて、理想的試

験制度論で述べました様に^{はつべうのうりよく}発表能力、^{ちどう}観察力、^{ちどう}理解力、^{ちどう}記憶力、^{ちどう}推理力等の^{ちどう}児童の本質的能量を^{けういきてき}教育學的に検査して入學を許すので御座〔い〕ます。そうなりますと何程受験準備が施されましたも^{はうはふ}子供の^{はうはふ}本質的能量を改善する以外に方法がないので御座いますから、^{じゆけんじゆんびくわんけい(ママ)}受験準備^{おん}歡^い仰^とと言ふことになりはしませんでせうか。

理解力と稱して算術の試験をしたり、観察力と稱して理科の試験をしたり、又記憶力と稱して地、歴、理の試験をしたり、^{しけん}発表力と稱して^{こくご}國語の試験をしたりしてはなりません。理解力なら或る問題を口述しては^ど何れ程理解したか、ある文章を與へてはどれ丈思想を理解したかを見、記憶力なら長期、短期にわたつて^{かくしふ}復習を許さない方法で^{けんき}検査し、観察力なら科學現象、自然現象、社會現象等について其の精粗を検査するので御座います。又其の外、意志力の検査なども加へ、其の細目にわたつては各中等學校の^{どくじ}独自の研究に任す可きであります。只^{たごちうい}注意すべきは其の教材は^{せうがくかう}小學校と同程度異教材であることと、常識論で此の方法を研究すべきでないことであります。中等教師の常識からは、決して^{ぜんき}前記の様な教育學的検査は行ひ得ないので御座いますから、^{てん}此の點に充分の意を拂ふ必要があらうと蛇足をつけ加へるものであります。

第五章 受験準備の話

一 なぜ受験準備が必要か

現在の^{しけんせいど}試験制度が、^{せんが(ママ)つしゆだん}非科學的な優秀生の^{せんしやう}選^{せん}拔^{はつ}手段でありますことは、^{せんしやう}前章に委しく述べました。しかも、其の優秀生の定義は、現在の中等學校側の試験傾向から推しますと、「^{くわんぜん りかい}六ヶ年間の小學校の教材を、^{じどう うんめい}完全に理解し記憶したもの」で御座います。^{じどう うんめい}児童の運命が「より」教育的な學校を選んで^{たがひ きやうそう}互に競争して入學しなければならない以上には、^こ此の定義に合致することをもつて運命開拓の秘訣とするは必然で御座います。加へて「教育は可能」であり、殊に現在の様な記憶主體の試験には「^{せいかく}正確な教授は^{いこう}有効」で御座います。

されば^{のうりやう}本質的に^{いこう}能量のある子供は、^{いこう}事實能量は低い^{いこう}が、^{いこう}有効な教授訓練によつて^{けうい}教育されて優秀な學力を把持した子供に打ち負かされない様にと、日常、心を練ることは佐々木、梶原、宇治川の先陣争ひの^{れきし}歴史を持たぬ國民にしても、^{きやうそう}競争の在する限りは拒むことが出来ない^{ひつぜん}必然の姿であります。其れが舊制度の試験法によりませうとも、新制度の内申書に據りませうとも「教育の力によつて^{ちのう}低い^{けうい}智能の子の學力を、^{けうい}能量の高い^{けうい}教育をうけない子供の學力と同等以上^{つくりあ}に作上げる事が可能」であり、優秀生選抜法が中等學校の入學試験法である限り、防ぐことの出来ない^{ちどう}児童の世界の生存競争の姿であります。^{じゆけんじゆんび}受験準備は此の深い事實を原因として^{せんざい}存在して居るもので、徒らな存在では御座いません。

今少し^{いままこ}委しく説明致しますために、^こ此處に十三才の子供を偶然な機會に、^{にんづ}百人連れて參つたと致します。その子供等の^{ちどう}能量を、最高十點、最低〇點と定めます。最高の標準は、教師が少しも^し教へないでも、^{けうい}獨りで^{きおく}教材を理解し^{きおく}記憶し^{さいてい}應用して行く才能の者で、^し最低〇點の標準は何を^{をし}教へても、^{けうい}導いても^{けうい}教育することの不可能な者^{こざ}で御座います。此の様な標準から^{ちどう}百人の^{ちどう}児童を調査致して見ますと、

十點……		0名 神童(天才)	
九點……天才なり。神童なり。と少しの教育の加減で言は	} 五名	} 二〇名……優等生	
〔れ〕たり、天才があるんだが遊んで居るのでさ			
つぱり成績が上らないなどと言はれる子供			
八點……誠實に勉強するために優等賞を貰つたり、先生に	} 十五名		
可愛いがられたり、級長になつたりする子供			
七點	} 六〇名……普通兒		
六點			
五點			
四點	} 一五名	} 二〇名……劣等兒	
三點			
二點	} 五名		
一點			
0點			0名 低能 (白痴)

大低の團體は此の様な數に近く分類の出來得るもので御座います。此れ等の子供によりますと、一月なり二月なり過去に教へた事は能量の七、八の子供では仲々記憶して居るものではありません。殊に、二年、三年の昔に至つては尚更で御座います。九點位の子供でも少し理解の骨の折れる所は忘れ勝ちであります。まして、教授をした教師が、教授法の劣等な教師であつたと致しますと、間違つて理解し、記憶して居る場合が間々御座います。されば何等の復習もさせませんで、二ヶ月位以前に教授をした教材を考査致しますと、能量の八、九の子供は六、七でよく勉強して居た者の位の力より現はしません。又同一の試験に能量、六、七位の者を理解させ復習させて考査致しますと、九、十の復習の完全でなかつた者と同一の力を現はします。又此の考査の成績は教授した教師の質によつても大變に相違致しますし、子供の身體的影響、家庭事情なども大變影響致します。其れでありますから、同一教材で種々な環境の子供を同時に試験して見ても、其の結果が直ちに能量を示すものと即斷することは出來ません。此の様な理由から、舊制度の試験法で選んだ優秀生の中にも、普通兒が澤山入り混みますし、又内申書でも能量の六點位の子供が優秀生として、どんぐり入り混んでしまふのであります。内申書の成績が故意でなくとも優秀生選抜の手段にならない一原因が此處に潜むのであります。内申書の選抜が低い能量の子を優秀生と

誤認する點を委しく申しますと、割合に保護者一帯が教育に不熱心な學校があつて、其の中に六點位ののうりやうの子供を持つ非常に教育に熱心な家庭が一軒あつたと致します。其の子は毎日、豫習、復習を完全にして居り、他の子供は豫習、復習などしたことがないと致しますと、教室での活動でも短期の記憶調査にでも他の子供より優秀なのは當然であります。そして其の子が誠實であればある程教師に愛される様になり、其の努力が買はれる様になり、首席の地位を占める様になるのが自然であります。此の様な子が、中等學校に入學してから、以前の様な努力を續けなかつたり、中等學校全體が其の子以上の努力的兒童の集團であつたり致しますと、其の子の眞價が暴露されて、優等だつて随分出來の悪い優等だと言ふことになるのであります。しかし此の例は、一面現在の競争試験には其の能力丈ではいけないのだと言ふことの證據とはなりません。實に現在の競争試験には學力の強大を必要とし、其の學力は能量+努力(復習)の結果でありますから、自然ある特殊の準備が必要となる次第で御座います。此れが受験準備存在の根本原因で、又其の準備が教育的であり、時間的に經濟であらねばならぬ理由であり、單に六時、七時まで小學校に止めて置いての放りばなしの教育や、經驗のない家庭教師のなし能はざる所以であります。此の受験準備の競争試験に有効なことを直視致しますならば、私共は何物かの暗示を受けないでは居りません。事實此の原則が、人間社會に存しますがために能量の五、四、三と言ふ人々が社會の第一線に立ち得るのであり、能量の八、九と言ふ人々が社會の落伍者となつて貧窮の底に怨み死ぬのであります。例へて見ますなら、能量の五か六よりない人でも、或る種の職業に専念三年間精進しますれば、少しも其の職業に經驗のない、八、九と言ふ能量の人よりは、其の社會では價值ある人間として待遇されます。又八、九の能量の人が三年より精進しない所を、五、六の能量のものが十年も精進致しますなら、より優秀な社會人として社會が待遇するのであります。此れが社會の本質であつて、此の社會の縮圖が兒童の世界では、中等學校入學難であり受験準備であるのであります。されば單に「子供に苦勞をさせたくない」ための恐れと嫌惡から來た試験廢止論者、受験準備廢止論者は、此の點を深く考へては、社會人となる子供を持つ親の身として何物か大きい、暗示に打たれはしないでせうか。「可愛い子には旅をさせよ」と先人も坊ちゃん教育を排して居りますが、此の暗示も又坊ちゃん教育を排しては居りませんでせうか。

二 小學校内の受験準備

小學校で中等學校入學者のために、正確な教授、指導を、兒童の發育を考慮して行ふことは、理論として差し支へなく、むしろ監督官廳の統督指導のもとに、最も科學的に行ふことは家庭内の非教育的な準備から見ますなら理論として最も妥當的で御座います。

しかし理論として正當でありましても、其れを價值として考へますと全然無意味のものであります。もともと中等學校の入學試験は小學校教材の徹底如何を考査して居るのでありますから、準備教育の目的も小學校教育の徹底以外にある可き筈がありません。よく無理な準備教育や、「どうかして旨く入ればよい」主義の準備教育を小學校で施して居るのを見受けますが笑ふに耐えない次第で御座います。殊に試験を投機的に考へ、二三校受ければどれかがひつかる、其れに間に合ふ様に教育するなどと言ふ教員の如きは論の外で御座います。只管、小學校教材の

徹底を期す可きが現在の準備教育の目的で御座います。さて此の準備教育が何故小学校教育の一部に編入して無価値なので御座いませうか。

今、府縣全部の學校が一齊に、小學校教員の仕事の一部分として公然と之れを行ひ、準備を行はなぬ學校は一校もないと致します。其の時は受験生全體が準備教育をうけて來て居るのでありますから、其の試験に現はれる結果は、兒童の生來の能量の程度と、教師の良し悪しと、兒童の努力の差とでありまして、準備教育の兒童にもたらす幸福は何處にも御座いません。又準備教育を一齊に各小學校が行はないと致します。其の試験に現はれる結果は、矢張り兒童の生來の能量の程度と教師の良し悪しと、兒童の努力の差とで御座います。

即ち「一齊に小學校が準備教育をすること」は、「一齊に小學校が準備教育をしない」のと價值に於いて同じであります。むしろ一齊に準備教育を許すことは、上級の學校へ行かぬ子供に對する、小学校教育の差別待遇であり、小学校教育の時間的一部の變則的な延長であります。此れこそ、屋上屋を重ねた教育と言つて差し支へありません。此の準備教育の價值のある所は、此れを行ふ學校と、行はぬ學校とある所から生ずるのであります。若し之れが正しく、科學的に行はるゝものとなつてなりましたなら一部分でも幸福な子が生じますから決して、曲事ではありません。只夜七時、八時まで、だらゝ教育を「施」したとか、身體的影響を考へないとか、休息が充分でないとか、單なる記憶練習をして居るとか、小學校の正規の課目を放棄するとかになりますから、此處に弊害が生ずるのであります。されば小學校内の受験準備に効果あらしめて、其の弊を助長せしめて居る罪は、局部に之れを行はぬ所と行ふ所とあるに起因し、局部的に之れを行ふ所と行はぬ所のあるのは當局の優柔不斷に原因して居ます。當局の態度を見まするに其の無意味を笑はれても、其の局部的、差違の施設を罵られても、敢然として弊害除去のために、全般的に、監督、指導する勇氣もなく、又それかとして斷然差別的になり、當局として責任を負ひ兼ねるからとして禁止し、其の禁を徹底させるために、二人三人の小學校長を處罰する勇氣もないので御座います。此の點は當局の反省すべき所ではないでせうか。又次に罪の一部は受験準備を必要とする様な妙な、記憶主體の問題より呈出出来ない中等學校にあります。又一部の罪は「小学校教育を破壊する様な強請」を小學校にする父兄にあり、最後には父兄の評判に媚び、自分の職分に不忠實な小學校長と職員とにあると私は斷言致します。故に前四者が互の職分を正しく理解するならば、小學校内の準備教育なるものは決して其の弊を罵らるゝことがないであります。

されば結局純正な小學校内の受験準備教育は、結局教育の不均等と非教育的準備を避けるために、特に此れが爲の時間を設けなぬで小學校教材の徹底を期するのみに御座います。言ひ換へますれば、特に時間的に準備教育を施さずに、正規の教授の徹底が自然に準備となる様な立派な教授を小學校にのぞむのであります。そして準備教育の時間は、映ない仕事ではあるが劣生指導に費すことが國家の喜びであり、眞の教育的手段では御座いませんでせうか。其れがためには教材の配列、教授法の研究等根本的な改善と努力とを必要とするは言はぬ所であります。

三 家庭内の受験準備

家庭の受験準備とは、家庭教師によつて、物々しく教育することを意味して居るのではありません。燈下針持つ母や、新聞片手の父の膝下で、來年中學校なり女學校なりに入る子供が夜一時間なり二時間なりの復習をすることを意味するものであります。勿論此の時間を家庭教師に委託することは、家庭の自由であります、私は以下、父や母の友として、此の準備について申し上げます。

此の家庭の準備教育は、小學校教育の補助行爲であつて、科學的であり、體育的でありますれば有効なもので御座います。よく小學校内の準備教育弊害の聲につれて此の家庭の教育まで間違つたことのように考へる人がありますが、決して「曲事」ではありません。むしろ有効な正しい事(ママ)で御座います。私は若し父なり、母なりが教授の立場に立つ場合を考慮して次に話を進めて参ります。

府立某高女の教頭が、昭和四年度の選抜試験後の感想に、次の様なことを申されました。

「今年試験をして見て、入學を許さなかつた子供に今まで見受けなかつた二種類の型があつた。

一、は口問口答と言ふ様な所から「口答試問」とか「試問の答へ方」とかと言ふ本を無暗に詰め込んで妙な常識らしいことは随分知つて居るが肝心の小學校の教材は一寸とも理解して居ない子供。

二、は全然試験がないとして復習を一寸もして居ない子供。

どうも小學校の教材がすっかり理解されて居なくては試験に合格はしませんね」と。

實に小學校教育の理解の深度を見ることを眼目として居る現在の試験からながめましたなら此の二つの缺陷は當然表はれ出ることでありませう。そして此の缺陷は重に家庭でこしらへ上げられるので御座います。

子供の可愛い餘り「試験がないんだから、まあ、勉強なぞしなくともよいさ」と言ふ調子で親も子供も呑氣になり、小學校の教科なぞ一向氣にもせず、又小學校でも小々位出來なくとも原級留置にはする譯には行かないので、乙なり丙なり付けて無事卒業としてしまひます。其れで試験に行きますからすっかり内容を暴露してしまうので御座います。

又一方では「試験はないが口答試験がある其れも常識な(ママ) そうだ。其の練習[を]しておかなくては」と言ふ調子で、

「今の總理大臣の名前は」

「市長は誰か」

「文部大臣の名は」

「大臣の平均年齢は」

「お父さんの名は」

「お母さんの年は」

「兄弟は何人」

「何人生れて何人死にました」

「お家の職業は」

「士族か平民か」

「平民とはなんですか」

「電話番号は」

「家の間数は」

「電燈は何燭光のを使つて居ますか」

「一ヶ月の瓦斯代は」

「米は一升いくらして居ますか」

「貴郎はどんなにして勉強して居ますか」(毎日十時頃までして居ると答へさせる)

「どんな課目が好きですか」(算術と國語が好きと無理に答へさせる)

「どんな遊びが好きですか」(何か一つ決めておく)

「どんな英雄が好きですか」(一人決めておく)

「大きくなつたら何になりますか」(答へられる様にしておく)

「旅行したことがありますか」(どこか決める)

「驕辯はいくらですか」

と言つた有様で、種々雑多の智識を、子供の頭を物置小屋と心得て、投込む様にして詰め込みます。子供は奇妙な常識に長けて、妙に屁理屈を言ふ様になります。其の傾向が自然、試験官に悪影響を及ぼすので御座います。こんなのを親許ではなく、教師の中にも、行つた人があることを實際に見聞致しましたが、笑ふに耐えないものであります。これは、中等學校側で兒童の態度を見るものとして採點の材料にもならないのに聞いたのが最初で、次にメンタルテスト、常識試験と言ふ風な言葉が誤り取られたので御座います。此のことは熱心な家庭程、注意しなくてはなりません。

次に家庭教育は、只小學校の補助教育ではある事を意識して、素人教育の缺陷である「馬鹿暗記」に落ち入らない様注意しなくてはなりません。智識の教授に當つて最も安易な、其して効果の多い様に素人間に思はれて居る事は、理解なしに無理に記憶させることで、父親や、母親や、兄弟によつて施される家庭教育の最もよく落ち入り易い弊害で御座いますから、よく注意すべきであります。又此の素人教育と同じ様に未熟の教師や、大學生などの内職の家庭教師の親切が、落ち入る弊は、考へさせ理解させないで丁寧な言葉として教へ込んで、無理に記憶させることで御座います。これは兒童の頭を記憶の機械として、推理判断の世界から遠く離してしまふ、恐ろしい教育であることを知らなくばなりません。人間が母の胎内から文化人になるまで、肉體にしる精神にしる先祖が經過して來た進化の道程を踏むのが原則で御座います。されば其の先祖の發見した智識を教育するに當つても、理解なしに單なる言葉として詰めこんではなりません。其の智識の發達の道程を踏ませ根本的に理解させ、其して其の智識を應用する域まで導かなくては完全な教授とは申されません。此の様に眞に子供が教材を理解して参りますと、獨りで勉強が好きになつて参ります。即ち他から強ゆる教育でなく子供の中から働き出す教育を施しますと、

子供は自分の活動で眞理を発見し、自己を擴充して参りますから本能的に研究心が刺激されて喜び勇んで書物に親しむ様になります。

されば家庭教育として受験準備を施す場合には深く此の點に留意し、子供を殺さず活々とした精神活動を起す様に導く可きであります。

第六章 家庭教育で兒童を優等化する方法

一 劣等児の發生原因と其の受験準備

劣等児と普通言はれて居ります子供は、能量の低い子供には違ひありませんが、曰く「馬鹿」即ち白痴ではなく、大人になると、どの道かで結構一人前として、待遇される質の子供であります。學課の不出來な子供でありますから、能量が充分あるのではありませんが、劣等児と言ふ極印を押して普通扱ひにしない事は、正しい事ではありません。

現在の小、中學校の劣等児の調査をして見ますと、主に大量生産主義、即ち一級に五十人、六十人と詰め込んで、通り一遍の教育をして通して行く制度の犠牲者であります。實に恐る可き事實ではありませんか。誠に現在の教育制度は、小學校、中等學校、高等學校、大學と大きな教育機關に百人二百人と、まとめて入學させ、四人か五人かの教師に委託して、一年一年順送りに六ヶ年、或は五ヶ年で次へへと押し出して行きます。五十錢銀貨の鑄造ですらあの精巧な機械で、あの様に澤山の不完全な品が作られて、鑄直すのであります。まして人間の手になる畫一的な大量生産であります。其の上に機關である教員には、事實の問題として教授の上手なもの、下手なもの、熱心なもの、不熱心なものがあります。粗惡な製品は、出來ないと斷言し得るものが、一人でもありませうか。子供の智能は雜多です。粗惡な教授は必ず通り一ぺんです。此處に本質的に低い能量のものが劣等児となる大きい動因がひそみます。今委しく説明しますために、子供の智能を次の様に假定致します。

一位……獨りで教材を理解する子供

二位……或る教材を暗示丈で理解する子供

三位……一通りの説明で理解する子供

四位……極く丁寧に二度も三度も説明して理解する子供

五位……五度も六度も説明して理解する子供

一位の子供が一時間で理解し、二位の子供は二時間で理解し、三位の子供は三時間、四位の子供は四時間、五位の子供は五時間で理解する教材が順を追ふて一年分配列されて居たと致します。

其して三位の子供を理解させる程度の教授より出來ない教師が、兒童を一年間受持つたと致しますと、四位、五位程度の子供は、先生の教授を理解出來兼ねて、有耶無耶に一年を過ぎて、劣等な成績者として評價されてしまひます。其して二年目に四位の子供が理解するまで教授する教師が受持つたと致しましても、其の教師は、前年度の教授を基礎にして教授致しますために、矢張り四位の子供の中の幾分かは救ひ切れなで、五位の子供同様の劣等児として評價されてしまひます。運惡くも三位の程度の子供を理解させる力よりない教師に、四年も五年も受持たれし

またなら、其の子供達は災難で御座います。其の子等にとっては四時間も五時間もわけのわからぬことを教員が一人でしやべつて居ります。外の子供は面白そうに活動するが、自分にはさつ(ママ)ぱり面白くありません。仕方ありませんから横の生徒の顔でも見て居るか、又窓から空の雲行きでも見て、歸つてからの餓鬼大將振を想像し、言ひ知れない興味と、ユートピヤ氣分に浸つて居ります。時折其れがために、突然先生に立たせられてしかられます。益々面白くありません。教師の目を掠めて紙つぶてを放し、試験には他人のを盗見致します。誠に此の子等にとっては教師は鬼で教室は地獄か修羅道で御座います。そして五年なり六年なり堅い椅子に腰を掛けた苦痛を記憶として母校を立ち去るので御座います。此の様な工合で作られた劣等児が一枝に相當の數あることを私は斷言致します。子供の出来ないのは教師の罪であります。白痴低脳に非らざる限り、現在の教育制度では、大學教育まで受けさせられない譯は全然ありません。原級留置は劣等教授の所産と斷言致します。しかし尚恐る可きは此の劣等教授を覆隠するために、原級留置を出さないと共に、劣生指導も行はない學校であります。原級留置のないのを嬉ぶ前に、子持つ親は、劣生指導を行つて居るかどうかを觀察しなくてはなりません。受験準備をする、しないより尚恐る可き問題であります。時には受持教師が此の劣等児を隠す手段として、乙とか甲とかと言ふ評價手段を用ひることであります。よくある事で、親は馬鹿な子でもほめられると嬉しい、殊に甲と評價されると、其れが即ち實力なりと信ずるもので御座います。

「私の家の子は、全甲で卒業したが府立へも一流の學校へも入らなかつた。」

「甲と乙だけで出来ない子ではないと思つて居たら、もう、あつちの中學、こつちの中學と五つも六つも落第して、ほんとうに此の子には泣かされました。」

など言ふ話を聞きますが、此んな事實を求めたら山とあることでありませう。此の様に大量生産の現在の教育制度と、家庭の無關心と、未熟の教師の卑怯とが劣等児を作り出して居ります。

「私の家の子は勉強が嫌い」と言ふ場合には、丁度、身體的に言つたら熱を出して居る時であります。捨て置親の無關心を哀れまねばなりません。私の組にはどうも怠け者が十人程居ると思ふ教師は先づ、

「私の教授は」

「教室で熱心さは」

「私は五十人の生徒を持って餘して居るのではないか」

「私は何時間を教授に使つて居るか」

「遊ぶ時(ママ)間と子供に接する時間とはどうか」

と反省しなくてはなりません。そして自分が教師たる資格のないことを自覺した時は、潔く職を去る可きであります。

實に劣等児と言はれて居る子等の生活は不愜であります。反抗することの出来ない者に消化の出来ない、口にも入れることの出来ないものを無理に食へと言つたら、其の人はどんなに無慈悲な人でありませう。子供の理解出来ないことを無理に記憶せよと言ふことは、これと同じではないでせうか。一家の主婦には數學の智識が必要であると言つて、代數の基本的智識のない婦

人に二次方程の理論を、一通りの説明の後、暗記しろと強い、出来ないからと言って叱つたら、其の婦人はどんな抗議を持ち出すことでせう。主婦たるものは経済學の智識がなくてはいかん「生産と消費」に関する學説を理解しておけ、來週は試験する、女學校を出たんだから出來んことはない。などと嚇されましたら大抵の奥様は參つてしまひませう。其のくせ其の御婦人連は子 供 に對して、記憶しろ、試験するとやつて居る教師の教育を普通とながめる度腕がありますから感心してしまひます。

此の調子で、此の考へで、劣等兒の受験準備を始めたら、其の子はどんなに苦しみ、其してどんな結果が生まれることでせう。恐る可き事ではありませんか。又悲しむ可き事實ではありませんか。

私は此の劣等兒の準備教育は、只單に中學校へ入學さする目的で、施す可きではなく智能的に兒童を救ふ目的でなさる可きだと思ひます。されば小學校教材の徹底が、此の子等を眞に救ふ第一歩であり、中等學校を選ぶことが第二であり、中等學校での教育が其の三であることを附言し、此の教育は獨り學校へのみ任して置く可きものでないと注 告申し上げて置きます。此の教育に對する解決案は、次節に委しく述べます。

二 劣等兒が優等兒になつた話

今から丁度七年程前に或る夫人が、私の劣等 兒 教育研究の話をお聞きになつて尋ねて参りまして、

「私の長男のことで御座いますが、どうも馬鹿になつたのではないかと思ふので御座います。尋常二、三年までは、何の變つたこともなくて佐賀の小學校に居りました。尋常四年に東京へ参りまして、大崎町の小學校に厄介になりましたが、K大學の附屬の幼稚舎が大變よいと言ふので、其の學校の先生を家庭教師に頼んで、試験も都合よくして頂き、五年の四月入學を許して貰つてほつと一安心致しました。所が一學期の末に呼び出されまして、算術は二點五分、國語は二點七分五厘、其の上注意散漫で一寸とも先生の方を見て居ないと言って叱られました。子供は、私が心配するためか、此の頃妙になりまして、女中が一寸笑つても、飛び出して行つてなぐりつける。兄弟とは笑ひ興ずることがなく、親にも遠慮勝ちで可愛想でなりません。どうか、馬鹿か、馬鹿でないか丈御調べて下さい。此のために、私は心配で夜も樂々寝むられません。」

と言ふ話で御座います。私は氣の毒に思ひ、二週間程預つて能量検査を致しましたが、決して其の子は馬鹿ではないので御座います。前節申し上げた教育機關の作つた劣等兒で、能量は推理判斷の力は低いが相當短期記憶の強い子供でありました。今の教育制度は記憶力のある子は順應出来る様に出來て居りますから私は救ひ得ると確信致しました。

「此の子は方々の學校を轉々して居る間に、教材が飛び々になり、過去に教つた智識は聯絡なく各孤立して、其れがために、新に教はる教材を理解し記憶するのに困難で、智識が一寸も身にならないので御座います。殊に幼稚舎の先生の教育が此の子の理解するまで教授をして呉れない上に、宿題を掛け、宿題の中から試験をしますから自然成績がよくありません。其して教授がわからないために四方を見ます。そして注意しないと叱られる。學校では先生にしかられ、

家に歸へると生來氣の少さい子でありますから、兄弟も女中も自分を劣等兒としてさげしむだらうと考へて、神經衰弱をおこして居るのであります。此の子は救ふ唯一の手段は教材の根本的な理解をつけてやることで御座います」

と申し上げました。所か是非普通になるまで預つてほしいと、切實に願ひますものでありますから普通になるまでの「約束」で預りまして次の様な教育を施しました。

學校の進度にかゝはず、根本的な教材の教授を一通り終りましてから、今度は學校の進度と歩調を合せて豫習的に、學校で覺える覺えないにかゝはず、教材を眞に徹底さして進んで参りました。子供には「先生の目を追へ」と言ふことを口ぐせに言ひ聞かせて實行させましたために、二學期末には國語は八點七分五厘、算術は七點五分、地、歴、理の各科も其れに應じた成績を上げました。其して先生が母親に、「此の頃は、大變注意して私の教授を聞く様になり、大變活動的になつてよく活動致します。其れがために、成績が上りました、家でもよく勉強するらしいですね」と。

其の後K商工學校に入學し二年まで指導致しましたが、今では誰れの世話にもならず商工學校の五年として快活に生活に楽しんで居ります。しかし此の子を救濟しようと致しました時は、毎夜二時間宛、火の様な努力と、水の様な冷靜の能度と、菊作りが菊の育つのを楽しみ愛づる様な質の強いゝゝ愛情とを持つて向ひました。茶を入れること、菓子を出すことは嚴禁して母親の事情の許す限り、子供の勉強を參觀して貰ひました。母親も熱心でありまして子供が時によつて嫌になり、すね出して私が叱る時がありますと、母親が子供と一緒に涙を流す始末であります。子供の勉學態度は日にゝ改まりまして、教師と感情が一致する様になりました。私は此の子が成人した姿を見ます度に劣生を救ふ唯一の道は、

「愛、しかも母親の愛」

「教授、しかも科學的な教授」

であると痛感致します。

丁度前述の話の前後で御座います。市内の小學校の六年生で、某銀行幹部の遺兒で山村芳夫(假名)と言ふ少年の能量検査と看護指導とを依頼された事が御座います。

検査の結果は第一節で申し上げました様な分類によると五位程度の子供で御座います。其して學力は尋常三年位の所で性質は純で粗野でありました。母の申すには、

「此の子の父がなくなります時呉々も此の子の教育を頼まれました。父の言葉がなくとも此の子の將來のため、どうしても中等教育はうけさしたいので御座います。加へて其れが私の責任で御座います。どうか中學へ入れる様にして下さい。出來は大變に悪いのも知つて居ますし勉強は大嫌ひで學校でも始終、たゞせられて許り居ります。兄が少しく厳しく教へますと二階の窓から飛び出して、石を窓へ投げつける。近所では狂人ぢやと言つてゐる始末で家でも持て餘して居りません。私はどうか芳夫が一人前になつて死にたいと思ひます」

と實に馬鹿程可愛いは親の情、さもある可きで御座います。私はしかし子供の學力が學力で御座いますから、

「中學校へとおつしやつても學校で卒業させて呉れますか。尋常三年位の力ですよ」と申し上げましたら、

「いや學校では、先生が山村は悪戯で亂暴で仕方がない。しかし勉強の方は、山村の様に本も讀めない、算術も出来ないのが十二三人居る、落第さしても來年矢張り同じ事だから卒業させると、お〔つ〕しやいます」と、

私は深く考へて一年遊ばして置けないかと尋ねましたら出来る丈來春中學へ入學したいと言ふので御座います。其處で次の様に答へました。

「能量が低い上に、學力が一寸も、ついて居ないので御座いますから、中學校の三年位の教育を受けさせる丈で五年かゝると考へ、五年を卒業させるまでには八年かゝると考へて頂くなら、中等教育のうけられることを斷言致します。其れ以上焦つても教育が無駄になります。其の様な年月で卒業するにしましても學校へ任せ切りでなく、特殊な教育を施して行かなくてはなりません。時間と母親の熱意とが永續しま〔せ〕んでせうから、まあ考へ所で御座いませう」とすると母親が、

「出来る丈でよいから教育して頂きたい」との切なる希望で御座います。其處で教育を引き受けて見ましたが、三年も四年もぼんやりと、外界の刺戟のまゝに活動して参りまして統一と言ふことを一寸も知りません。智識を得て喜んだ經驗なども全然ないので御座います。それでありまして少し厳しく一つの教材を徹底させようと致しますと直ぐ倦きて聞えない振り、泣き真似、狂的動作で教師の作業を「防」害致します。教師の熱意と子供の習慣性との鬭争で御座います。私は體裁の許可を家庭から得て「なぐる」場合と「しかる」時と「笑ふ」時とを研究して置き、二日程前に準備を整へ、一度に其の子供には十年振位の極眞剣な怒りを示しました。此の様にして叱る一方、一緒に笑ひ與つてもやります。生來が純な子でありますから可愛い所が随分ありました。しかし其の教育が普通でなく、子供が普通でないために、劣等兒研究の助手をして貰つて居つた、其の子の受持ちのK氏が「山村の教育は不可能だ、あの子を退學させてくれなければ自分が辭職する」と申し出ました。私は氏に、

「私は白痴でない限り、教育出来ると思つて居る、教師の熱力が根本の力なんだ。方法が拙劣でも、學問がなくとも、教師に熱意さへあれば必ず劣等兒は救済出来る。殊に自分が劣等指導を標榜して一年、此の子を救済出来ないんなら、私の研究は無價値なものである。山村の退學は、今でも差し支へないが、其れと同時に私の信念と研究とを放擲することが残念だ。もし山村を退學させるんなら私は此の私塾を閉鎖しよう。」

K氏は此の決心に感激して呉れましたので豫定以上に効果が上つて、遂に中學三年まで指導致しました。其の間中學校で中等兒としての成績を立派に上げ得たのであります。其の教育中に此の子には特に、機械をいぢることに非常な長所のある事が發見されまして、今は其の方向に轉換して前途に大きい光明を認めて居ります。此の子供等は眞の劣等兒が中等兒になつた實例で御座います。

又今から四年以前の八月に高等女學校の一年生で前田光子(假名)と言ふ子供の父親が尋ねて

参りました。

「私の娘は女學校に入學させましたが一學期に呼び出されて、どうも成績が劣等だから、何處かへ轉校したらどうかとすゝめられました。小學校時代は中位であつたのですが、どうも困り果てました見て頂けませんか」と、

検査して見た結果は、

「中等兒の上の部。第一節の分け方の様ですなら第三位の子、推理力の不足な丈が缺點。成績不良の原因は此の子は馴れない人には、中々物を言はないので其れがために受持の女教師の反感を買ひ、學校に與味を失つて自然、復習豫習を怠り劣等成績を上げたので御座います」

此の子供は三ヶ月間で常態に復しましたが、私が能力を女學校の教頭宛に材料をつけて證明し上げてました。結論は、

「中の上の能量の子供で、現在中等教育に順應出來得ない理由はない。」と〔。〕

所が其の後二學期の終りに「戸田君は中の上の子供と言はれたが、中の中だから私の學校を續けても差し支へがありません」と事實成績書は乙揃ひで御座いました。

此の様に過去十ヶ年の私の経験は限りのない程實例が御座いますが結局私は、

- 1 家庭が教育に熱心であり
- 2 教授が科學的であり
- 3 教師に熱力があり

さへすれば如何なる劣等兒でも優等化し得るものと確信致して居ります。

次に私は科學的教授法と言ふ點について家庭教育の立場から申し述べます。家庭で行はれる病氣の治療は下層階級程多く、家庭で行はれる教育は上流程多いで御座います。而して家庭療法に對する研究は、より低級にしろ決して原始的のものではなく、中には往々現在の醫家の處方以上の効果ある薬を用ひて居るものすらあります。しかるに家庭教育に至つては誰れでも一寸手を出し易く、誰れでもすることで御座いますが其の教授法に至つては頗る原始的で、王仁に、稚郎子が論語を教つた時代の教授法を想記せしめる様で御座います。私は此の點について家庭教育者としての劣生指導法を述べます。

三 智能的缺陷の補給方法

A 記憶の悪い子

學校で記憶の悪い子と言はれて居り、また本當に物おぼえの悪い子には、學科を基本的に理解させることが肝要で御座います。先づ教材の整理、整頓を行つて、極く大事の部分丈を選び抜き、教へる部分を出來る丈不足にし、順序よく互に聯絡ある様に排列して言葉で、實物で、動作で印象強く理解させます。單なる言葉として決して記憶さしてはなりません。

次に其の理解を言葉なり、繪なり、文章なり、動作なりで發表させます。完全に發表出來るまで導きます。其して今度は忘れる時間を計つて置き、三十分置き毎に一、二度二時間おきに一、二度、二日置きに一、二度と言ふ具合に發表致させます。其の後は折にふれ時に乘じて記憶を呼び起す手段を講じてやります。此の様に致しますと大底の記憶力の子供と伍して充分な成

績を表はします。

B 推理力のない子

此の様な子供は、雑然と自然界及社会の事象を見聞し、雑然と知識を記憶するので御座います。其して事象と事象との間の同一性と差異性に気が付かないので御座いますから、此の點に意を用ひるとよいので御座います。即ち同一性と差違性に氣のつく様に練習してやるとよいのであります。此の練習が推理の練習で、實に教材取扱ひの中の至難な部に屬し、其れで居つて家庭で最もよく施し得る方法で御座います。其の理由は被教育者が一人、教育者が一人でありますが故に、よく指導し得るからで御座います。

此の推理の説明には算術が最もよく適して居ります。いや理科でも、地理でも、國語でも皆此の種の教材にはなりますが、説明しよといふ意味で例を算術にとつて具體的に説明致します。

今還元算の方則を教授致しますと致します。

(イ) $7 \times 8 = 56$ } 此の二つの式を與へて此の二つのどこが同じか、どこが違ひかを見出さ
 $0 \times 8 = 56$ } せます。

〇は7だと言ふことは直ぐに首肯出来るので御座いますから、此の同一性と差違性から〇を求める式 ($56 \div 8 = 7$) を考へ出させ $0 \times 9 = 45$ 、 $14 \times \Delta = 126$ 等で其の式を實證させ其して次の様な類似問題で練習させます。

$\Delta \times 7 = 70$ 此の様にして練習の結果「未知数を見出すには答を既知数で割ればよ
 $6 \times \Delta = 72$ ……等 い」と言ふ方則を決定させ「何故か」と其の理論を思考の力によつて
 $13 \times \Delta = 65$ 發見さす場合[があ]るので御座います。これが第一歩で次に $0 \times 72 \times 4$

$= 144$ の場合は第一のと何處が違ひ、何處が同じかを比較させて違ひが式にはどう表はす可きかを思考させるので御座います。又植木算の教授の場合なら、

(ロ) 二軒ある道路の片側に四米置きに櫻を植えると何本入用か。

と言ふ植木算の原則を充分理解させてあると致しまして次の問題を提出致します。

(ハ) 二軒ある道路の両側に四mおきに櫻を植えると何本入用か。

(ロ) の問題と (ハ) の問題を讀まして同じ所と違つた所を吟味させます、只一點「両側」と言ふ點が差違點でありますから此れを式にするにはどうするかと言ふ事を何時間でもわかるまで考へさせるのであります。

{ 原 式 $2000 \div 4 + 1 = 501$ (本)
 { 求むる式 $(2000 \div 4 + 1) \times 2 = 1002$ (本) … (即ち両側と言ふ差違點が掛ける2となつて

表はれて居ります)

推理の練習には、思考の材料となる基本知識のないこと、推理する問題と過去の知識との間に同等性が全然ないこと、又差違性の全然ない事が大禁物であります。

難問を突然與へて「さあ推理の練習だ考へろ」などと言ふのは無茶な話で、子供を苦しめる丈の收穫で推理の練習ではありません。

C 注意 敢 漫 な子

此の様な子供には一物を注視する習慣を養ふことが肝要で御座います。

一手段は教室などでは、受持教師の話中は、教師の目を追ふ様にやかましく注意する事で御座います。又或ひは相當の騒がしい中で讀書さして内容を把握する練習をするので御座います。

しかし教材を理解させる點から申しますなら、最も強い興味で研究對照に引きつけられる様に環境をしむけることが何よりも肝要なのでありますが、相當技術の必要な教授で御座いますから、家庭では至難で御座いますが、四六時注意しますなら相當の成績を上げ得ることで御座いませう。

D 意志力の養成

意志「力」の弱い子供には、「人間の意志力が尊ぶ可き作業をする」と言ふことを腦髓深く染み込む様に仕向けるのであります。又出来る丈意志力の旺盛な人の感化を受けさす様にして甘い育て方をしない様、我がまゝを許さぬ様にしなくてはなりません。私の經驗であります甘い一方、可愛一方の育て方をした子供によく意志力の弱い子供があります。

此の意志の弱さが不良少年少女を作る根本動因をなすのでありますから、よく注意しなくてはなりません。

四 學習上の缺陷補給方法

算術、國語、綴方、地理、歴史、理科、について述べますが此れ等には立流な幾多の教授法が發表されて居りますので、私が此處で各科について申上げることは大量生産主義的教育の犠牲者である劣等兒の救濟手段として家庭で行ふ方法を六年の劣等生を標準として申上げるのであります。勿論、教室での教授方法から生れたもので、中等兒とも優等兒にも適用の出来ることは申すまでもありません。

A 算 術 科

算術科の不出來な子供をお持ちの方は、小學校の四、五、六年の教科書を主として、

(イ) 一萬以下の加減乗除が出来るかどうかを檢查しな〔さ〕い。

(ロ) 小數の加減乗除が完全に出来るかどうかを吟味なさい。

(ハ) 分數の加減乗除が完全かどうかを吟味なさい。

(ニ) 諸等數は次の各項が完全に出来るかどうかを研究しなさい。

- 1 金高の勘定
- 2 長さの名稱と各單位間の關係
- 3 面積を表はす名稱と各單位間の關係
- 4 體積を表はす名稱と各單位間の關係
- 5 重さを表はす名稱と各單位間の關係
- 6 時間を表はす名稱と各單位間の關係

(ホ) 面積の求め方が三角、梯形、圓について出来るかどうか檢查しなさい。

(ヘ) 體積を求める方法と其の根本的問題の理解の程度を吟味なさい。

(ト) 比及比例の概念^{がいな(ママ)ん}が出来て居るか又其の根本問題が出来るかどうかを吟味なさい。

(チ) 歩合算(公式に直ちに当てはめられるもの)を解く力があるかどうかを吟味なさい。

調査の結果以上が確かな智識^{ちしき}でありましたなら普通児^{ふつうち}と同等以上でありますから、上述の智識が確実に児童の財産となる様に努力せらるゝのが何よりと思ひます。

以上は私は形式算^{わたくしけいしきざん}と稱して居りまして、此れが出来て居る子供で始めて應用問題の練習^{れんしゆ}が可能ですであります。

應用問題及幾何^{もんがい}は問題の解法を記憶する課目ではなく、如何にしてこれを解く可きかを考へさせる教材であります。即ち推理練習の好材料であります。しかし其の教授は中々家庭で理想的に行へるものではありませんから熟練した教師^{じゆくれん}に委託^{あ(ママ)たく}す可きであります。

けれども家庭で行ふ様に是非なくされて居られる方は前節推理の練習の節をよく理解されて行ふ様御すゝめ致します。

B 國語科

讀めるか、わかるか、書けるかが根本^{こんぽん}の問題であります。

(イ) 讀めるかどうかを吟味し、讀めなかつたら讀める様になるまで一緒に讀んでやるのであります。考へさしたり、調べさしたりしてはいけません。どんぐり讀ませるのであります、寺の小僧がお經を讀む様に教科書をどんぐり讀ませるので、此れが國語の成績を上げる根本要諦^{よんぱん}であります。讀める様になつたら次の作業^{さぎ}を致します。

(ロ) 書取の練習

a 漢字^{かんじ}をおぼえさせる爲に、記憶^{きおく}の練習をさせるのであります。しかし此れは無意味な言葉としてではなく其の字が表はす内在的^{ないざんてき}の實體、思想と結びつけて覚えさせることが大切であります。

河、山、國家、存立等其の意味をも一^{(ママ)しよ}諸に覚えさせる様にしたならよいと思ひます。

b 文章書取

綺麗に早く書く練習^{れんしゆ}であります、殊に今後の社會はペン書きの社會^{しやくわい}でありますから極必要な練習であります。字劃を丁寧によく氣をつけて書かせることではありますが、若し中にどうしてもよくなる子供^{こども}がりましたら、鉛筆をよく削らして、薄い紙で小學校の讀本を一日一頁位づゝ引き寫しをさせると上手になります。其の時に注意^{ちゆうい}することは、早くかゝずに一點一劃も注意して書かせ、批評の時には其の筆法にまで及んで讀本と比較對照し進歩の歩合を始終氣をつける様^{やう}にしなくてはなりません。

(ハ) 語句の意味

重要な語句丈抜き出してよく理解^{りかい}する様説明し過去の理解^{れんらく}と聯絡をもたせる様にして記憶をたしかにすることあります。

(ニ) 内容の吟味

其の課に何か^{なに(ママ)か}書いてあつたか、思想^{しゆう}がどの様にならべられてあつたかを發表させる。

此の時は決して言葉として教へないで、節、段の分類に指導を與へ内容をしつかり捉へるま

では何時間でも指導し研究させるのであります。

此の様に全部を精讀研究させることは、必ず時間が許すまいと思ひますから一冊の本の中、極く肝要と思ふ所を、五課なり十課なりで結構であります。

又補助として多讀させる意味で雑誌を強制的に讀ませ、内容を言葉で發表させることが大變國語の力を増大させますことを附言致しておきます。

C 綴方科

綴方の拙いと言ふ事は思想の發表の仕方を知らないと言ふことであります。小學校あたりでも、教師が、よく上手な文章を讀んで聞かせたり興味のある話をして綴方を書かして居りますが、こんなことで思想の發表形式を會得する子は優秀な子で劣等兒では御座いません。又よく「感情に棹さして」なぞと申しまして、「書かんとする感情」を第一と主張する人もありますが「どう言ふ風に書くか」を教へないで感情ばかりが生じて、書き得るものではありません。「嗚呼此の景色を繪にしたい」と思つたからとて繪を書く術を知らなくては、どうして其の景色を寫實出來ませう。綴方も同じであります。先づ「どう言ふ風に書くか」を知り、書くと言ふ感情が湧けば此處に相當の作品が生れるわけであります。

今此處に申し上げる方法は、牧口常三郎先生の應用教育學の一部門で、私共は文型主義と名づけて居る教授法で、私が此處で始めて社會的に發表するもので御座います。其の原理原則については、早晚先生の手によつて詳細に發表されることと信じて居りますので、私は只其の實地教授の方〔に〕についてのみ申し述べます。

只此の方法文を見た人は、模倣の教授ではないかと疑問を持ちますが、決して單なる模倣ではなく、理論正しい文章教授で、創造へ至る第一階梯であることと、決して兒童の創造的分野を無視したものでないことと文をよく記憶して居つて頂きたいのであります、次の文章は尋常小學讀本第十二卷の第二課で御座います。

第二課 我が南洋

大正八年に開かれたバリー講和會議の結果として、我が國は、かつてドイツ領であつた南洋諸島の中、マリヤナ・パラオ・カロリン・マーシャルの四群島の統治を委任されることとなつた。

南洋といふと、誰でも先づ極めて暑い不愉快な處と思ふであらうが、此の四群島邊の氣候は、同じ南洋の中でも溫和な方である。もちろん一年間の氣温を平均すると、内地よりははずつと高いが、いはゆる海洋性の氣候であつて、四季や晝夜による差が少く、氣温の最も低い時でも六十八九度を下ることなく、又最も高い時でも九十四五度を越すことがないから、案外しのぎ易い。其の上、ほとんど毎日勢のよい雨が降つて暑さを洗ひ去るので、一層心持がよい。

植物は、十分な熱と光と水分によつて、思ふ存分に成長する。其中で最も目につくものは、コゝ椰子とパンの木である。コゝ椰子は、大きなものになると高さ十四五間もあつて、幹の上方に大きな羽狀の葉が集つて附いてゐる。其の葉の根本には、大人ぐらゐもある實が鈴なりになつてゐる。此の實の中には固い殻があつて、其の内部に白い肉のやうなものがある。これを乾固めたものはコプラといつて、椰子油の原料となる。椰子油はシャボンやらふそくの材料として用ひられ

る。まだ十分に熟さない時は、中の肉が透明に近い液で、これがなかなかうまいものである。パンの木も到る處に美しい林を作り、一年の中ほとんど七八箇月の間は、常に實を結んでゐる。實の大きさは子供の頭ぐらゐもあつて、土人の食料として最も大切なものである。彼等は其の肉を蒸焼にしたり、又は餅についたりして食ふ。味は大體さつまゐものに似てゐる。

土人の風俗は處によつて多少違ふが、一般に文化の程度の低いことは、家を見ても着物を見ても直に感ぜられる。即ち家は大い椰子の葉でふいた掘立小屋、着物といつても極めて簡単なもので、男も女もたゞ布や腰蓑などをつけてゐるに過ぎない。しかし近來は文明人に接する結果として、だんだん洋式の家屋も出來れば、洋服を着るものも多くなつた。今日では我が國で設けた學校などもあるから、子供は日本語を上手に話し、禮儀などもよく心得てゐる。

彼等土人の最も得意とすることは、舟を繰ることである。舟といつてももとより丸木舟に過ぎぬが、それでも大きいになると、數十人もの事が出来る。一方の舟ばたから長い腕木が出てをり、其の端に船體と並行してうきが結びつけてあるから、うきが結びつけてから、簡単なものではあるが、決してくつがへらない。

海の美しいことは此の邊の特色の一つであらう。海はあくまですみとほつて、波の静かな處では、船から下の方をのぞくと、海底の有様が手に取るやうに見える。青・緑・紅・紫、目の覺めるやうに美しい魚の群が、さんごの林や海草の間に遊んでゐる有様は、全くおとぎばなしに聞く龍宮の景色を見るやうである。

此の文章位の作品をどんどん作らせることが、國語教授の目的であります。當抵現在の綴方教授法ではのぞみ得ないことであります。只文型主義によりましてこそ始めて此の文章程度の作品を出し得るのであります。これとて相當の組織と熟練した教師とが必要であります。

家庭で此の方法で成績を上げますには此の文章よりもより低い所にのぞみをおかなくてはなりません。

此の文章は六段に分たれて居ます〔。〕

第一段 我が國が南洋の四群島の統治を委任されたこと

第二段 氣候のこと

第三段 植物のこと

第四段 土人の風俗のこと

第五段 土人の得意とすることがら

第六段 海のこと

以上の様であります。第一段落でも文章として立派に生きて居ます。第一段落、第二段落の文章と致しましても南洋について相當に語つて居る文章として決して、つまらぬものではありません。空間的事實の説明に尋常六年として第二段までの文章が書けたと致しますなら、劣等生の中には入れられます。勿論全課の様な説明體の文章を六年で立派に書き上げさせることは小學校教育の理想で、十分可能な事ではあります。現在の小學校教育でも、中學校教育でも各教師は其處

までを理想として意識もして居らず、可能とも信じて居りませんから、第二段までの形式で文章がすらすらと書けましたなら其の子は綴方の優等生として待遇される事で有りませう。しかし此の位のことは家庭の仕事として充分成功し得る事でありませう。先づ最初に

(イ) 第一段に何を書いてあるかをはつきり意識させませう。

第二段に何を書いてあるかをはつきり意識させませう。

第二の作業として

(ロ) 次の様な文章を用意しておいて讀ませませう。

私 の 家

今年の春叔父様が北海道へ轉任せられた結果として、私の家庭は、かつて叔父様の家であつた郊外の文化住宅に引き移つることゝなつた。

郊外の文化住宅といふと、誰れでも先づ極めて淋しい嫌な處と思ふであらうが、私の家の附近は、同じ郊外の中でもにぎやかな方である。もちろん夜のことを考へると、銀座などよりはずつと淋しいが、いはゆる郊外の町であつて、夜と晝とによる差が少く、夜の最も淋しい時でも電燈の消えることがなく、又最も晝のにぎやかな時でも雑踏するなぞと言ふことがないから、案外氣持がよい、其の上、ほとんど毎日郊外の空氣と日光に親しむことが出来るので、一層氣持がよい。

(ハ) 第二課の我が南洋の第二段までは南洋の委任統治と氣候の事柄がよく現はされて居り、私の家では郊外の新しい家のことがよく現はされて居ります。其の表現して居る内容が全然相違して居ります。表はされて居る内容の相違、即ち文章の差別性は、一讀して直ちに認識されるのであります。しかし「其の形式は」となると全然同じ[な]のであります。句點を御らんないさい。節をよく御らんないさい。内容が違つても形式が同じでは御座いますか。此れを意識させることが出来ませうればもう八分通り成功で御座います。

(ニ) 私の家と我が南洋の第二段までで次のことを比較して答へさせませう。

	答	
	我が南洋	私 の 家
段は	二段	二段
第一段のは	一個	一個
、は	三個	三個
第二段のは	三個	三個
第一。と。の間に、は	三個	三個
第二の同	六個	六個
第三の同	一個	一個

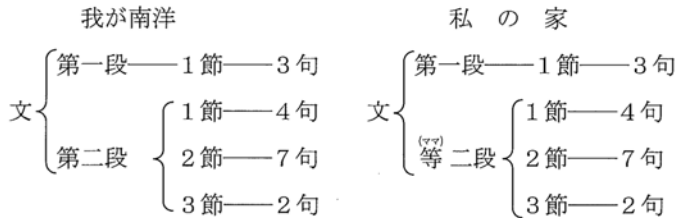
と。の間に節と言ひ、と、の間に句と言ひますなら、第一段は一節で出来て居り一節は三句で完成して居ります。

第二段は第一節 ^(マ)か 四句

第二節 ^(マ)か 七句

第四節が二句であります。

即ち此の形式は



子供に右の様な形式だと言ふことをよくのみこませます。

(ホ) 此の次は一 ^(マ)諸 に作つて見ます。

題 私の犬の子

第一段 此の春以來お母様におねだりした結果として、私はおとなりの「マル」が生んだ子供の中、白に茶のぶちのある犬を育てることにした。

第二段第一節

犬といふと、誰れでも先づ吠えて亂暴なものだと思ふであらうが、私の犬は、犬の中でも温和な方である。

第二節 もちろん猫とくらべると、ずつと亂暴であるが、いはゆる男性的の氣象であつて、かげ、ひなたが少なく、食べ物と見ればほしがるが、人が居ないからと言つても猫の様なことをしないから、ほんとに可愛い。

第三節 其上、ほとんど毎日の様に藝をおぼえるから一層可愛い。

(ヘ) 次には題を與へて作らせ、其の上に批評を加へて作法を知らせて行きます。回を重ねるに随つて上達致します。

(ト) いよゝゝ獨りで作れる様 [に] なつたら隨意の題で少々此の文の様に行かなくとも、かまひませんからどしどし澤山作らせて、文體を改造する所まで行けますならもう充分で御座いませう。

今國語讀本卷十二の第五課によつて教授した子供の作品を一、二、例としてかゝげます。

第五課 蜜 柑 山

沖を走るは丸屋の船か

丸にやの字の帆が見える

調子のよい蜜柑採歌がすみ切つた晩秋の空氣をふるはして、何處からともなくのどかに聞えて来る。今登つて來た方を振返つて見ると幾段にもきづき上られた山畑には蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。どれを見ても枝と云ふ枝にはもう黄金色に色づいた實が鈴なりになつてゐる。黒い程こい緑の葉の間から、其の一つゝゝが日の色にはえてくつきりと浮出てゐるのが見える。又少し登る。どの山を見てもどの谷を見ても蜜柑の木でない處はない。ふと見るとついそば

の木の下ではかごを首に掛けた二三人の男が器用な手つきで蜜柑を取つてゐる。さつきの歌の主であらう。あちらでもこちらでもさえたはさみの音がちよきんゝゝゝと聞える。

ふもとの川を白帆が二つ三つ通つて行くあれは港の親舟へ蜜柑を運んで行くのであらう。小春日和の暖さにとけて其處からも夢のやうに船歌が聞えて来る。

権之助坂の夜 (教授の文)

ぼううゝゝゝ

ごううゝゝゝ

かん高い省線電車の汽笛が静かな夜の空気をふるはして、驛の方から忙しそうに聞えて来る。今登つて来た方を振り返つて見ると遙か遠くまで擴つて居る目黒の町には、ぼんやりした電燈がちらばつて居る。どちらの方を見ても、暗の中には、黄色にぼかされて居る灯がちらりほらりと見える。黒い暗の中から其の一つ一つが何事かを話す様に浮き出て居るのが面白い。

又少し登る。右を見ても左を見ても、高さ十尺程の「がけ」がならんで居る。ふと見るとついそばの「がけ」の下では、二百燭光位の電燈が、道行く人のために光つて居る。オリオン堂の廣告のためであらう。しかし此の坂を通る人のためには、有り難いことである。

上と下から自動車が絶えず通つて行く。乗合、圓タク、皆は何處へ行くのであらう。秋の夜の静けさを破つて、あつちこつちから自動車のらつぱの音が聞えて来る。

夏の思出の佐介ヶ谷 (子供の文)

ごうゝゝゝゝ

杉の梢を渡つて涼い風が眞夏の暑さをぬぐいさるかのやうに、そよゝゝと吹いて来る。今登つて来た方を振り返つて見ると、近くにお稻荷さんのお堂があるのか、たくさんの鳥居が行儀よく並んでゐる。どれを見ても皆赤く塗つてあつて額がかゝつてゐる。青いゝゝ稲田の間から其の一つ一つがくつきりと浮出てゐる。

又少し登る。もう赤い鳥居は杉林にさへぎられて見えない。ふと下を見ると山のふもとの線路を電気機関車が貨車をひいてとほつて行く。きつと東京へ行くのであらう。ほんとうに景色は繪の様である。ふもとの畑には夏のあつさをしのいで百姓がこやしをかついでゆく、あの人たちは此の眞夏でも休まないのだらうか。ふもとの方からは暑そうな子供の萬才の聲が聞えて来る。

工 夫 (子供の文)

えんやこら

どつこいしよ

調子のよい工夫の歌がさわがしい町の空気を破つて前の方から聞えて来る。今来た方を振り返つて見ると石や其他いろゝゝなものが道路の片側にばらゝゝになつて居る。どれを見ても綺麗と思ふものはない。どれもこれも泥だらけになつてごたごた見える。

又すこし行く。前を見ても後を見ても、ほり返して居る道路でない所はない。ついそばを見ると大きなとんびのやうなものをもつて五六人の男が聲をそろへて地面をほつてゐる、さつき

の歌の主であらう。道路をほつてゐるがかちんゝゝとはつきり聞える。

貨物自動車がいるゝゝなものをもつてくるのは仕事につかふものであらう。暖い秋の朝の静かさを破つてさわがしく、ぶうゝゝと聞えて来る。

海濱學校(子供の文)

じやぶんざゝゝ

じやぶんざゝゝ

いつも平凡な波の音が暑い夏の日を涼しくするやうに打よせてはかへり打よせてはかへつて、海藻や木片を打上げて行く。今泳いで来た方をふりかへつて見ると海女の乗つてゐる舟が二三そう沖の方へ行くのがみえる。すぐそばには大きいあぶ〔く〕や小さいあぶくがいつぱいたつてゐる。波打際では大きな逆波にころがされて「きやあゝゝ」といふ聲が聞える。

又少し泳いで行く。後から大きな波や小さな波がいくつもゝゝゝこちらへ来るのが見える。ざぶんといふ音がしたと思つたら私もはねかへつた波にころがされて思はず「きやあ」といつた。足だの體だの砂まじりの水にぶたれ、上にたゝきつけられたのですりむかれたやうにいたい。

向ふの砂の上には大ぜいの人がころがつたり起あがつたりしてあたゝまつてゐる。私もそこへびつこをひきゝゝ行つてあたゝまつた。眞夏の太陽は皮ふをこがすやうにじりゝゝとてりつけてゐる。

評 型を少し破つてあるが馴れてからは差し支へありません。

D 歴史科

興味本位の方が最もよい結果を表はす様であります。何科に對しても興味と言ふことは必要であります。歴史は特に興味の引き易いものであります。中等以上の成績を揚げて居ります子供は大體興味を感じて居るのであります。劣等成績の子供は興味を持たないものが多ふ御座います。中には興味はあるが、記憶力のないために成績の不良な子供も御座います。

其の興味と言ひましても能量のある子は教科書中の代表的事件、代表的人物によつて表はされて居る其の時代の諸相を知り、延いては時代の推移人心の變化等を理解して、眞の興味が生ずるのであります。能量のない子供では中々其の様な事で興味を持ちませんから、事件其のものを出来る丈面白くきかせ、記憶しなければならぬ重要な事項は抜き出しにして興味を感じた話との間に聯絡を取つて智能的缺陷を補給する節で申し上げた様な方法で記憶させるので御座います。

E 地理科

普通の記憶の子供で地理文が嫌で出来が悪いと言ふ子供は、

例 關東地方

山	脈、	河	川、	平	野
産	業、	産	物		
都	會、	交	通		

と言ふ様に列擧式に教師が黒板に書き、さあおぼえておけなぞと言ふ教授をされるので出来るのであります。それで同じ事をするのでも家庭では推理式にしなくては其の缺陷は救はれません。

例 先づ豫備智識として地理附圖の見方をしつかり教へておいて、

1 關東地方はどちらが高いか

山脈 高い方にはどんな風に山脈があるか。

どんな山が代表的なものか。

河 山脈が其の様にあるとすると河はどの様に流れるのが本當か。

實際はどんな風に流れて居るか。

どんな河が代表的か。

平野 山と河とが其様であると平野はどんな模様か。

産業 山と河と平野の工合からどんな産業が盛になると思ふか。

實際にどんな産業が盛んですか。

どんな代表的の産物がありますか。

都會 山と河と産業の工合から中心としての都會はどんな所にどんな風に發達して居るか。

歴史的にはどんな都會があるか。

交通 其れにつれて交通はどんな風になつて居るか。

例 2 奥羽地方

此の場合には前と同じにしながら關東地方と比較對照して氣候風土の産業、都會に及す影響を吟味させます、そして白地圖を用意して（印刷になつたものでも教科書を引き寫しさせたものでも）地勢圖、産業圖、都會圖、交通圖を作らせるので御座います。獨りで教科書によつて出来ないものは手傳つてやることは差し支へありませんが書いてやらぬ様にしなくてはなりません。

F 理 科

各學年での理科は小學校では實物實驗によつて大體教授をして居る筈でありますから、家庭では只智識を整理してやり、觀察の粗大な所を注意してやる程度の作業で充分であります。

もし小學校で實物實驗によらないで教授して居る所があつたと致しましたなら、其れは實物實驗によつた教授の整理に當る所を本體の教授として行ひましたのでありますから、子供達は不完全な言葉の理解しかして居りません。其〔れ〕でありますから日曜などを充分利用して實物の直觀教授をして、其の缺陷を補はなくてはなりません。直觀教授の後で學校では一通り整理をすることになつて居り大體は整理をして居りませうが、其處が大量生産主義教育の止むを得ざる所で豫定時間の不足のために整生が粗理になり勝ちなものであります。

此の粗末がよく劣等生を産むのでありますから、家庭では國語教授の時の内容を理解させる方法で教科書を段節に分けて實物實驗での教授の場合に雜然と統一なく、入つた智識や受け入れ兼ねた智識を整理補充して記憶させるのであります。

六年の受験の準備の場合などに、四年時代から、復習整理することが必要となりました時は、参考書などによらないで四年生からの教科書によつた方がよいと思ひます。其して教科書は圓周的配列法になつて居りますから植物、動物、礦物、生理、物理、化學、其の他と言ふ様に子供に分類させ、其の研究に家庭が手傳ふ様にしたならよからうと思ひます。

以上は只簡単な家庭での教授法を申上げましたので御座いますが、子供によつて種々教授法も違はなければなりませんから、實地に當りましては相當な智識と強い熱力と忍耐とを必要と致します。

第七章 入學試験活用法

生存競争は、社會の一面觀でありますと共に、我々生物には免るゝことの出来ない必須的な運命で御座います。人は、生れ落ちると共に、此の運命に直面致しますが、社會的に、生存競争の場裡へと飛び込みますのは、小學校教育を受け始める七歳からであります。しかしまた充分意識をしない時代でありますから、其の劇烈な本來の姿は現はれませんが、其の後、年を経ると共に意識的になつて参ります。此れが意識的になります場合に劇烈さが加へられ、其の曉に負者と、優者が現はれるので御座います。此れが社會人の實想であり、社會進化の一大動因で御座います。されば、此の原理はおそかれ、早かれ社會人としての生活を營ませる人間には、はつきりと意識しておかなければなりません。生存競争の反面を、可愛い子には見せたくない、協和とか、相互扶助とかと言ふ社會の美しい原則を充分知らして、美しい人生をおくらせたいと希望する人が此れが爲に五百萬なり千萬圓なりの財産を残しておいたと致しましても、どうして五十年七十年の永い人の一生の精心的、物質的幸福を、單に財産を残したと言ふ丈で擁護し得ると斷言し得ませう。眞に深い愛情で子供の幸福を願ふ人でありましたなら、相互扶助の一面と生存競争の一面とを同時に認識させて、此れに對する充分な教育を施すことを考へるでありませう。

されば一年、二年の早い、遅いを争ふことなく、あらゆる機會に正しく生存競争、優勝劣敗の天理を充分に認識させて、其の競争に、努力の價値あることを教ふ可きではないでせうか。

しかし子供の世界に、最も教育的に科學的に與へられた機會は、中等學校の入學試験であります。活用しないことは、天與の機會を捨て去ることではないでせうか。

「可愛い子には旅をさせよ」と言ふ諺もあります。人生の濇い方面丈を見せて育て上げる室咲きの坊ちゃん嬢さん教育は、眞に子供を可愛い所以でありませうか。獅子は子を産んで三日にして谷底に蹴落して其の力を試すと聞きます。十三歳で爲朝は鎮西を切り隨へ、橋本佐内は「十三歳にして志を立てざる者は將來を語るに足らず」と喝破致しました。十三歳前後こそ、社會を認識させる絶好の年齢であります。世の弊として入學試験を萬人が皆、恐れ懼む時に、取つて以つて我が藥籠中のものとして、活用致しますことは、決して非教育なことでも非科學的なことでも御座いません。むしろ諸葛孔明の智では御座いませんでせうか。

此の意味で入學試験を取り扱ひますからは、先づ親は子供の能量を試すものとしてこれを眺め、子供は努力の尊さを認識する様にと工夫〔し〕なくてはなりません。そして其の試験の結果につ

いては、父子共に勝つても誇ることなく、負けても悲歎することなく、努力の生活こそ誇りであり、感謝でもあることを十分體得する様に致す可きであります。

此の見地からの教育は、父は正しく其の子を理解するに努め、科學的な努力を子供に課して、人生の試合に出る選手としての絶えざる努力を續ける習慣を養成致す可きであり、母親は其の子の身體的養護に心して、其の努力が其の子供の體力相當であるかどうかを、始終注意す可きで御座います。されば徒らな叱責や、獎勵などは決してしてはなりません。社會の選手として、其の努力が正しいかどうかと言ふ點に評價の標準を置いて、表面に現はれた結果については責めたり、褒めたりせず、又子供にも其の表面的の結果については悲しみも喜びもしない只其の努力が満足し得るものであつたかどうかを反省する様にと習慣づける様にす可きであります。

よく私は、自分の子供を盲愛して居る親が、中位下の成績であり、又五倍、六倍と言ふ様な競争試験にのぞむ様な努力もさせずに、世の評判のよい府立や官立を志望して「運よく入れるとよいから」と言ふ、萬一の僥倖を希望して居るのを見受けます。其して其の上に二校にも三校にも願書を出して、萬一の爲に無駄な競争をさせ、又受持教師も、此れに共鳴して「運よく出来る問題にでもぶつかると仕合せだから」と止めも致しません。此の人々は子供を賭博用のものとして考へて居るのであります。「旨く入るとよい、萬一當るとよい」などと申すことは、子供の神聖を冒瀆するものであります。試験をうける子供は眞剣であります。親は「まあ萬に一にも」など言ひますが子供は「萬が一ではなく、百發百中」を希ふもので、哀れな淋しいことを子供に味はずものでは御座いませんか。親として無智な人であり、師として無定見の人で御座います。もしも子供自身までも「萬一」を希望するのでありましたなら、親と師とは「千三つ的の仕事を追ふ不經濟的な寄生虫的な人間の養成」をして居るのでは御座いませんか。其の子にとつても、國家にとつても恐る可きことで御座います。賢明な親は決してかゝる「偶然的幸福を追ふ機會」に入學試験を使つてはなりません。努力が人生で、努力の結果は、よくても悪くても其の人を高めも低めもしないことを教へなくてはなりません。私は入學試験を恐れるよりも、科學的、妥當的、入學試験出現の曉まで、其の弊に毒れるせらことなく、むしろ教育の機會として活用致したいとのぞむ者で御座います。

第八章 どんな中等學校を選択するか

一 競争率による學校の識別

學校の選擇は非常に重要なことと思ひます。しかし其の選擇には入學の可能を前提としなくてはなりません。されば子供の先天的能量と、後天的學力の公正な批判と、中等學校の競争率とによつて、入學が可能か否かを判定し其の判定によつて大體中等學校を定め、位置、電車便、友人等を考慮して最後の決定を致す可きだと思ひます。

しかし子供の能量、學力の判定には出来る丈熟練した教師の批判を參考にすることをおすすめ致しますし、各校の入學率は年々些少の違ひはありますが、大體相似て居るものでありますから照會して二、三年分を知り、其の最高を標準としたら大變よいと思ひます。

此の判定に参考に資するために、一般的な中等學校側の競争率と收容兒童の質との關係を申し上げます。

現今の様な非科學的な、妥當性を缺いて居る入學試験でも、其の選抜法が優秀生選抜法でありますから極々大體に、中等學校の生徒は、上、中、下と言ふ様に分類されて、各中等學校に入學致して居ります。これを東京府で見ますと、大體一萬五千人位の志望者の内五千人位は官、府立に劇甚な競争の後おさまります。残りの一萬人が一、二流の私立中等學校を争ふて、其して五千人位おさまります。其して其の残りは、各種の各個人には満足しない學校へと入學致します。其れでありますから、

上の者……官府立

中の者……一、二流と言ふ評判のある私立學校

下の者……普通以下の不良少年が居ると言ふ評判があつたり、官立へは、極々僅かしか、入學しないと評判されたりする學校

此れは極々の大ざつばな、わけ方で御座いますが、原則として能量のない子を上の能量の生徒の中へ入り混せて苦しませるのはよいことではなく上の能量の子供を下の者許りの學校へ入れるのも面白いことではありません。しかし大體の事を申しますならば、

- 1 五年、六年の小學校教材が完全に十分理解されて居る兒童
官、府立、七年制高等學校、八百人以上位の志望者のある各私立（約二百人募集する學校として事實の競争は三倍位のもの）
- 2 五年六年の小學校教材が十分に理解されて居ないが大體理解して居り、根本的な復習でないが一通りの復習はすんだことになつて居る兒童
四百人以上（二百人募集する學校として事實の競争は二倍位のもの）
- 3 學校成績は中以下で、五六年の復習が十分でない兒童
四百人以下（二百人募集する學校として事實の競争はない様なもの）

以上は極く大別でありまして、競争が少ないからと言つて決して、つまらぬ學校許りでなく、能力の低い子供許りとは決して申されません。又反對に官立でも、前章申し上げました様な理由によりまして劣等兒は相當に居り、決して優良許りとは申されません。只競争の劇しい學校評判のよい學校には優良兒が割合に多いと言ふに過ぎませぬ。其の他の學校にも充分に優良生は居りますが、只幾分劣等生が多いと言ふ丈であります。今私の外面的觀察による經驗から類集し、歸納して一瞥で理解の出来る様に表をかゝげますと次の様に御座います。

學校別	許可者	二對スル志願者	百人中の優良生	百人中の中等生	百人中の劣等生
官府立	A	八、九倍位	九五	五人	
	B	三、四倍位	七五	二〇	五人
私立	C	五、六倍位	五〇	四〇	一〇
	D	三倍位	二五	五五	二〇
	E	二倍位	一〇	六〇	二五

F 同數位 五人 六五人 三〇人

此の表によつても理解出来ます様に、府、縣だ立からとて劣等児^(ママ)がないとは申されませんし、評判が悪い學校だからとて、頭の悪いもの許りと言ふことは亂暴な推断で御座います。しかし第二章にも申し上げました様に、我が子の力、學校の内容、競争の程度を正確に知ることは中々至難^(ママ)のことで御座いますから、よくよく可愛い子供のために研究せら〔れ〕熟慮せられるを切望致します。

二 中等學校の選擇が兒童を優等生にも劣等生にもした實例

今から三年程前M、N、I、Sと言ふ四人の子供を取り扱つたことがあります。

Mの家庭は兄が東京高等學校で、姉は府立の第八に入學させてありましたので、B位(前掲)の學校へ是非入學^(ママ)したい、と言ふ願^(ママ)ひでありました。

Nは親類の子供が皆府立へ行つて居るから、B位の學校へと言ふ希望でありました。

Iの家庭は何所でもよい、と言ふ放任主義^(ママ)でありました。

Sは長男であり、子供の時に腦をいためた事があるので、家庭は教育に非常に熱心で、どうかして中等教育を完全に終らせたいと言ふので、父親が始終學習のことに注意致して居りました。

子供 能量($\frac{1}{10}$ 單位) 學力 希望校 入學校 其の 後

M	$\frac{8}{10}$	$\frac{9}{10}$	B	B	{ 第一學期に學習が $\frac{9}{10}$ を取める丈の努力をしないで $\frac{7}{10}$ 位であつたため、終りから三番程で、中々其の後 後中位まで行けず劣生扱ひをされて居ります。
N	$\frac{7}{10}$	$\frac{7.5}{10}$	B	C	
I	$\frac{7}{10}$	$\frac{7.5}{10}$	B	D	{ 一學期は中位で、其の後始終末位であります。努力 が伴はない爲であります。 一學期三番で其の後も優秀成績で勉強に非常に興味 を覚え學力も非常につきました。
S	$\frac{4}{10}$	$\frac{5}{10}$	F	F	

此の子供達^(ママ)が三年間にとつた経路こそ面白いものでありませう。

Mは勉強が嫌いになり、Nはお座なりで中等教育をうけて居り、Iは非常な興味を學校と學課におぼえてまぢめに努力して居り、Sは自分の努力を信ずる様になりまして面白く通學し、中等學校の卒業は可能であらうと思はれて居ります。其の原因はMは $\frac{9}{10}$ の學習力を要求して居る學校へ、 $\frac{8}{10}$ の能量^(ママ)で、入學したの〔で〕ありますから、 $\frac{1}{10}$ 丈の努力が必要なのであります。其れを子供も、家庭も、考へなかつたために、入學後、劣等成績をとつたのであります。

Nは $\frac{8}{10}$ 位の學習力を要求して居る學校へ、 $\frac{7.5}{10}$ 位で入學したのでありますから、努力を怠つた^(ママ)

時に成績が落ちたのであります、^(ママ) Iは家庭が放任主義であります、本人は $\frac{75}{10}$ の力で $\frac{7}{10}$ 位の学習力を要求して居る學校へ、入つたのですから、上位を占め此の嬉しさは興味を誘ひ興味は努力を生んでよい成績を上げて居るのであります。

Sは能量の不足を努力で補ひ易い學校を選んで、入學して成功したものと云つてもよいと思ひます。

Sの様な實例を、私は今から六年程〔前〕に、一度體驗致して居ります。

私が劣等兒救済を標榜して、一私塾を立てて二年目で御座いました。市内の某小學校の六年生でHとKと言ふ子供を預りました。

家庭の希望は共にB位の學校へ、入學出来る様な教育をしてほしい、と言ふのでありますが、二人共學校成績が五十人中三十四、五番で能量も $\frac{6}{10}$ 位なものであります。其處で私は前述第六章の様なやり方で三時間位づつ早教育を續けて見ました所が、どれも $\frac{8}{10}$ 位の學力を表はしまして、一見、優等兒の様でありました。此の結果は子供の能量に變化を來した澤でなく、子供の持分の全體が現在の様な教育制度では、どれ位順應出来るかを試みた結果、現はれた成績であります。勿論ある一部の才熊は變化しては居り能力も高まつては居りますが、しかし能量の變化は肉體の發育に根本の原因を有して居りますので、此の學力が表はして居る程決して能量が増したのではないのであります。されば私は家庭へ此の御子さんは、現在の學校制度では相當の評判のよい學校へ入學は出來ますが、今の學習力を發揮して行かない限りは後になつて苦しみ出しますから上級の學校へ入學後も相當の注意を忘れ下されません様にと申し上げました。

所が二人の中KはB程度の學校へ入りHはC程度の學校へ入りました。

Kは家庭での補終を打ち切つたため其の後二年でF程度の學校へ轉校しなければならない様に現在の學校教育の犠牲者になつてしまいました。しかし此の轉校先であるFは本人の能力と努力に相應した教育機關なのでむしろ本人にとつて感謝すべきものでありませう。

Hは此の後も、同じ様に學習上の缺陷を補ふ一方、獨立的學習態度の養成を致しまして、二年では記憶物は一人で試験に耐える丈の準備が出来る様になり、三年で國語が獨立し四年で英語、五年で數學、と言ふ順に獨立して、C程度の學校に順應する様になりました。立派な成功と申し得ませう。此れなぞは四年間もかかつたもので、最も難物の方に屬して居ります。しかし普通は一、二ヶ年の努力で現在の中等學校教育に順應する兒童は作り得るのでありますから家庭では充分氣をつけなくてはならないと思ひます。

此の様に、どんな學校にでも入れはよいと言ふ考へでなく、子供の將來、學校の様子、入學後の教育などをよく考へて、慎重に決す可きで、決して親戚の手前、近所の具合と言つた様な虚榮に捉へられて定めてはなりません。

されば「理智的の父、感情的の母、科學的の師」を得て始めて子供の正しき將來が光明をもつて輝くので御座います。

(終り)

<奥附>

昭和四年十一月廿六日 印刷
昭和四年十二月 一日 發行

入學試験の話と
愛兒の優等化
【定價 金壹圓也】

著作
權
所有

著者

戸田城外

東京市外大崎町上大崎三三六

發行者

戸田雅皓

東京市芝區白金台町一ノ四〇

印刷者

高桑準策

發行所 東京府大崎町上大崎三三六
振替東京 一九九二五

城文堂